

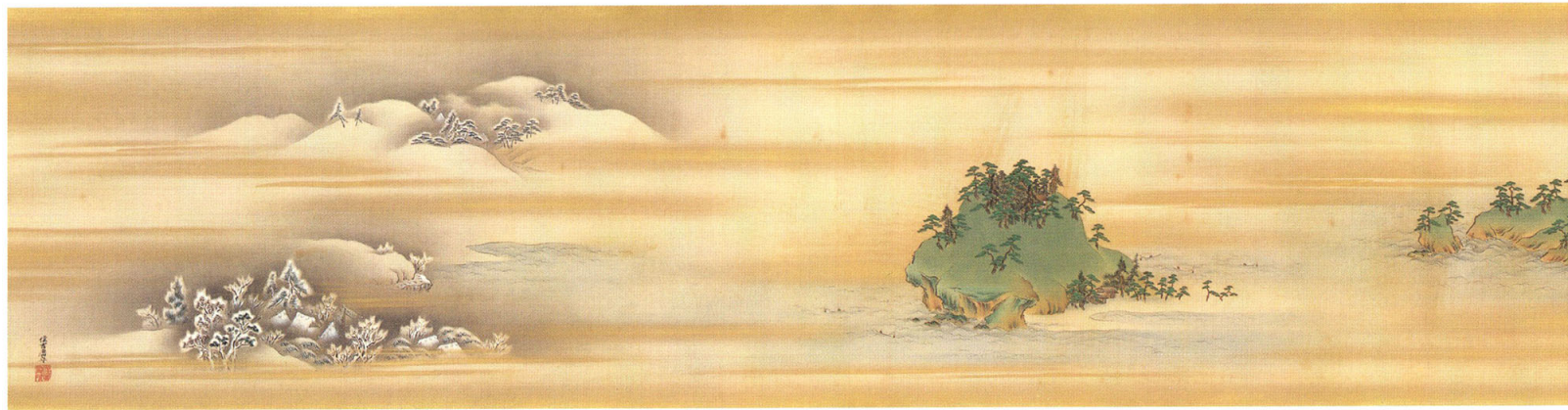


月見崎月



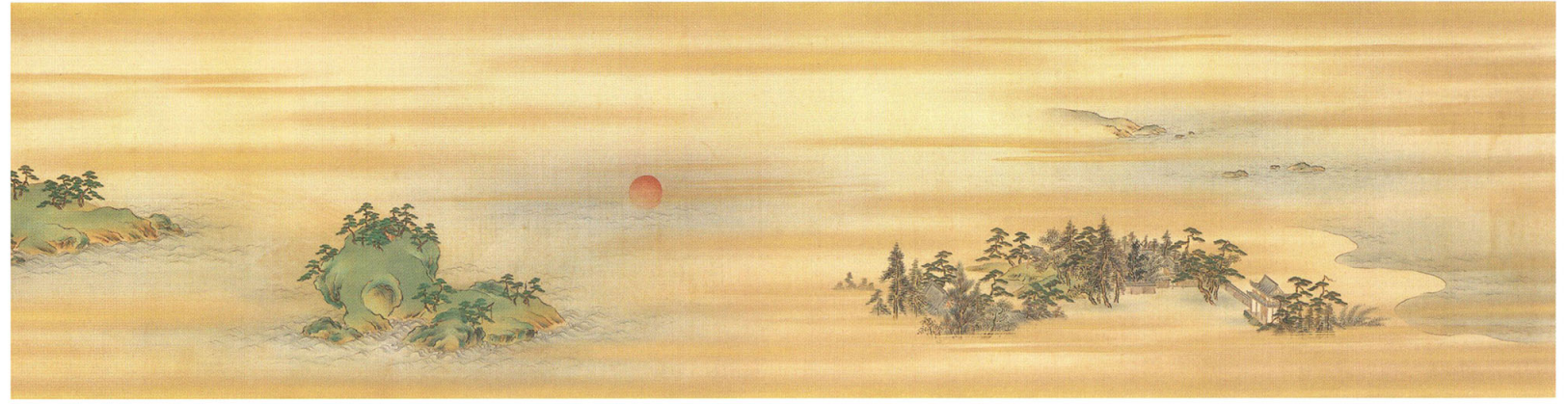
雄島旅栞

塩竈浦船



富山暮雪

海濱漁火



浮嶋翠松

籠嶋夕照

蕭寺晚鐘

3 塩松八景図巻 住吉広守

一卷

江戸時代中期(十八世紀)
絹本着色 三二・五×五四・二

名所絵は、中国の名所図の影響を受け、江戸時代以降は特定の名所地の八景、十景を選んで詩歌や画の題として盛んに制作されるようになった。近江八景、金沢八景、南都八景、隅田川八景、東都八景などが良く知られる。本図もそうした中で制作が企図されたもので、箱内の添え書きによれば、「塩松八景」として冷泉為綱(一六六四〜一七三三)が出題した「塩竈浦船」「雄島旅栞」「月見崎月」「蕭寺晚鐘」「籠嶋夕照」「浮嶋翠松」「海濱漁火」「富山暮雪」の瀟湘八景に倣った八題による和歌に因む名所絵である。

『仙台叢書』(全十八冊、別集四冊)の内の第六冊等の資料によれば、正徳四年(一七二四)仲春に仙台藩第五代藩主・伊達吉村(一六八〇〜一七五二)が、塩釜、松島の景勝地八箇所を選び、それに対して冷泉為綱が題し、和歌に優れた歌人八人が一首ずつ詠じたという。そして、詠じられたその和歌を吉村自ら書写して両所の神社に納めたとする。和歌を詠じた歌人は先の画題の順に、武者小路実陰(一六六一〜一七三八)、久世通夏(一六七〇〜一七四七)、鳥丸光栄(一六八九〜一七四八)、日野輝光(一六七〇〜一七二七)、冷泉為久(一六八六〜一七四二)、久我通誠(一六六〇〜一七一九)、中院通躬(一六六八〜一七三九)、冷泉為綱であった。

本作品は、巻末に「住吉廣守」の署名と「住吉絵所」の朱文方印があることより、絵はやまと絵を継承した住吉派第四代の広守(一七〇五〜七七)とする。広守は、享保十九年(一七三四)に將軍家の御用絵師となり、特に有徳院(徳川吉宗)に取り立てられ、寛延元年(一七四八)の朝鮮国への献上屏風の制作など、多く御用を務めて活躍した。しかし、本絵巻の制作について考えると、吉村が和歌を撰じた正徳四年(一七一四)とすると広守はわずか九歳であるので、絵巻の制作はそれよりも後年に、前述の「塩松八景」の和歌に因んで描かれたものと考えるのが妥当であろう。

(次頁解説)

4 高千穂・由布山図 田能村竹田

対幅

江戸時代、文化五年(一八〇八)
絹本着色 各九五・八×三五・八

右には高千穂を、左には由布山を描き、九州地方の神が坐す代表的な二つの山を対としている。高千穂は、天孫瓊杵尊の降臨の神話伝説があり、また豊後富士とも呼ばれる由布山もまた『古事記』等に登場し、古来より尊崇されてきた。

この二図を描いたのは、豊後岡藩の田能村竹田(一七七七〜一八三五)で、款記より竹田数え年三十二歳の折の文化五年(一八〇八)の作である。竹田は、藩医の家に誕生し、わずか十歳ばかりで藩校の由学館に入学し、詩才を認められ、また画を学んだ。寛政十年(一七九八)には幕命による『豊後国志』の編纂係を命ぜられ、これを契機に江戸や京阪などに遊学し、谷文晁や浦上玉堂、岡田米山人、頼山陽らの多くの文人と交流を重ねた。詩、書画に秀で、さらに和歌、音楽、聞香や喫茶、瓶花を深く嗜み、文人として当時から広く知られた。

本作品は、彼の画歴の中では初期の作例にあたる。高千穂図は墨を基調として樹木の葉に淡く色を施し、山や崖は流動的な描線で襞を重ねて点苔を繊細に布置してその表情を高める。中国の明末・清時代に見られる皴法を採り入れながら、彼の神山に対する敬虔な想いがこもった表現を創っている。上部には、岡藩の儒者・清原雄風(一七四三〜一八一〇)の和歌「あもりまし初國しらすかみよ、り いや高ちほの二上の嶺」が着賛されている。

これに対する由布山は、穏やかな皴法により、青緑山水を意識しながらも色彩を押さえ、実景的に捉えた構図で描かれる。中央に美しい山が威厳高く、霊山として描かれ、その上部には、村田春海(一七四六〜一八一二)の和歌「よろつ世に神さひたてるゆふのやま そらくゆく雲もふもとにそ見る」が着賛されている。春海は、江戸の国学者であり、歌人としても広く知られた人物である。各地を遊歴して日本の豊かな自然に接し、また様々な山水図に接した文人・竹田が、神の山という厳かな主題に臨んで、実に謹厳な態度でその制作にあたったと考えられるこの二図には、風景描写を越えた独特の空気が感じられる。

なお、本作品は、明治三十年(一八九七)に明治天皇が京都御滞在中に納庫された作品で、同様の来歴を持つ他の作品と同様、この時期に他所から買上げによって皇室に入ったものであろうと考えられるが、現在までにその詳細は明確にはなっていない。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

名所絵から風景画へ——情景との対話

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 76

編集 宮内庁三の丸尚蔵館
制作 株式会社 東京美術
翻訳 黒川廣子
発行 宮内庁
平成二十九年三月二十五日発行

© 2017, The Museum of the Imperial Collections, Sanjōmaru Shōzōkan